竹取少年

葉梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
竹取少年

【Ｎコード】
Ｎ５１２４Ｖ

【作者名】
葉梨

【あらすじ】
西暦３０１１年、国際宇宙大学歴史学科の天才少年アルベルトはフィールドワーク中の事故で１６５７年の江戸、吉原へ飛ばされてしまう。そこで出会ったのは残月という遊女見習いの少女だった。
――人生なめてる主人公が、ちょっと大人になる。【和風小説企画】参加作品。

一（前書き）

伊那さま主催【和風小説企画】参加作品です。どうぞごゆっくりお楽しみください。

一

野外ステージに七色のライトがぎらりと踊る。俺はマイクを握り直した。

「親父は言った
心優しく
手先が器用で
頭がキレれば医者になれ
家を継いで医者になれ

俺は答えた
親の仕事を言われるままに
受け入れる馬鹿がどこにいる
俺は医者にならねえ
俺は医者にならねえ

敷かれたレールを歩むだけの人生なんて
決められた道を進むだけの未来なんて
そんなもんいらねえ

自由と夢と希望と愛を
両手にいっぱい抱えて走れ

運命から逃れ
流星のように俺はゆく
果てしない可能性という名の……」

「ちょい待ち、ストーップ！」

演奏と歌を止める声がして、悦に浸って熱唱していた俺は現実に引き戻される。七色のライトも動きを止めて、一瞬辺りが静まりかえった。

「……おい、アルベルト、新曲のその歌詞、どうにかならねえ？」

重々しい口調で言ったのはギターのヤンだ。反して俺は胸を張る。

「俺様の自伝的エピソードだ。文句あっか？」

「ある。だっせーんだよ」

ため息まじりのヤンの言葉にベースとドラムも渋い顔で頷く。

「学園祭まで時間あるだろ。書き直せよ」

「そうだよ、解散ライブで恥かくの嫌だぜ」

俺はむっとして唇をとがらせる。

「どこがそんなに駄目なんだよ」

「どこがって……」

その時、練習時間の終わりを告げるアラームが鳴り、次のバンドのメンバーがどやどやとやって来た。学園祭を二週間後にひかえた野外ステージのリハーサルスケジュールはタイトだ。俺たちはその場を追い出され、しっくりこないまま練習を終えた。

ここは国際宇宙大学。通称ＩＳＵ。地球の衛星軌道上にぽっかり

と浮かぶ大学コロニーで、文学部から医学部、大学院、もろもろの研究施設がそろっている。その学力や研究成果はハーバード大学を凌ぐとも言われていて、いわば地球規模の最高学府だ。

「なんつうか、あれだ、おまえも卒業を前に色々思うところがあるんだろ、つまり、将来について」

俺ことアルベルト・カンバヤシはこの年、西暦３０１１年に十七歳で歴史学科を卒業する。俺はいわゆる飛び級制度を使って小学校を四年で、中学校を二年で、高校も二年で卒業し、十四歳の時に大学に入学したのだ。我ながら生き急いだと今さら思う。

「まあな」

ベースとドラムと別れ、巨大な窓から青い地球が見えるカフェでヤンとコーヒーを飲みながら、俺は仏頂面をする。挫折を知らない人生を歩んできたので、徹夜で書き上げた歌詞にダメ出しされたことで俺は不機嫌になっていた。

「親父さんの跡を継がないで、おまえ、卒業したら何するんだ？」

そう言って、ヤンは心配そうな顔でコーヒーを一口飲む。ヤンは俺と同じ歴史学科の四年で、二十三歳の中国系だ。日本系の俺とはアジア者同士仲が良く、年下の俺を弟のようにかまってくれる。

「全然考えてね。音楽でやっていけるとは思ってねえし、かといってやりたいこともねえし」

俺ほどの天才ともなると、様々な研究施設や企業から引く手あまたなのだが、どのオファーもいまいち気乗りしない。

コーヒーカップを覗きこむとむっつりとした表情の自分と目が合った。黒髪は日本系の父譲り、ブラウンの瞳はドイツ系の母譲りだ。

「とりあえず、医者にだけはならねえな」

「……頑固だねえ」

のんびりと苦笑いするヤンを睨みつけた時、俺たちのテーブルに歴史学科の仲間が五人やってきた。

「よ、アルベルト、ヤン。おまえらフィールドワークの行き先もう決めた？」

歴史学科四年の課題、フィールドワーク。それはＩＳＵの工学部が開発に成功した世界でたったひとつのタイムマシンで卒論のための時間旅行をすることだ。

「決めたも何も、俺、今夜だぞ、フィールドワーク」

「アルベルトがトップバッターか。で、どこ行くんだ？」

「ルネッサンス期のミラノ。万能人ダ・ヴィンチに会っちゃうぜ」

俺は今夜、万能の天才と呼ばれたレオナルド・ダ・ヴィンチを見に十五世紀のイタリアへ行く。

「おれは三国志の時代を見に中国へ。おまえらは？」

ヤンが訊ねると仲間たちは嬉々として答えた。

「俺はフランス革命真っ只中のパリ！」

「あたしは古代インカ帝国のマチュピチュ」

「私はリンカーンのアメリカ独立宣言を聞きにいく」

「私もアメリカ。ただしネイティブ・アメリカンの時代よ」
「僕はモンゴル。チンギス・ハーンの騎馬隊をこの目で見るんだ」
彼らは口々に自分の行き先を告げると最後に口をそろえた。
「このためにＩＳＵに入ったようなもんだからなあ」

ＩＳＵの開発したタイムマシンはＩＳＵの人間しか使用できない。そしてもちろん、むやみやたらに時間旅行ができるわけではない。歴史学科の学生さえ、時間旅行できるチャンスはこの一度きりだ。
「アルベルト・カンバヤシ、準備はいいか？」
スピーカーを通してブースの中からくぐもった声がする。
「おうよ、教授」
俺は素肌の上に銀色の特殊素材スーツをまとい、エレベーターのような円筒形のタイムマシンの前に立っている。そこへ一人の女性が颯爽とやって来た。二十代半ばくらいで俺と同じスーツを着ている。
「君が歴史学科の天才少年ね。私が君に同行するインストラクターのダニエルよ。よろしく」
長い金髪を揺らしてにこりと笑い、ダニエルは右手を差し出した。ちょっとかわいい。俺は鼻の下を延ばして彼女の手を握ったが、そ

の瞬間に右腕をひねりあげられた。

「指輪、はずしてちょうだい。そのピアスも。つけまつげ一本たりとも歴史に持ち込んではならない。フィールドワークの事前ガイダンスでそう言われたはずよ。聞いてなかったの？」

「いててて、いってえ！分かったよ！」

俺は右腕をさすり、指輪とピアスを慌ててはずした。怖い女だ。

「食事、抜いてきたでしょうね？」

「ばっちり！コーヒーしか飲んでねえぜ！」

「……タイムワープ前は水以外口にしちゃいけないんだけど」

ダニエルは頭を抱える。そうだっけ。

「まあ、いいわ。おさらいしておきましょう、君、ガイダンス全然聞いてなかったみたいだから」

嫌味っぽく言いながら、ダニエルはタイムマシンに右手を添えた。

「今から私たちはＩＳＵが誇るこのタイムマシンで十五世紀のミラノへ行くわ。そこで見るもの、聞くもの、肌で感じるもの、におい、すべてが本物。ただし、私たちは歴史の傍観者でなければならない。何にも触れてはならないし、誰にも姿を見られてはならない。私たちが足跡ひとつ残しただけで、歴史は変わってしまうのよ」

俺は大人しく頷いた。青い目をきらりと光らせ、ダニエルは満足そうに話し続ける。

「そこでこの特殊スーツ。これを着ていれば物体とスーツの間に０．

００１ミリの空気の層ができる。このブーツを履けば決して足跡が残らないし、足音もしない。そしてこの手袋、はい」

俺はダニエルから受け取った手袋を装着する。スーツと同じように素肌にぴたりと吸いつくようだ。

「この手袋は自分以外の何にも触れることができない」

唇の端を釣り上げ、ダニエルは俺に右手を差し出す。俺は手袋をした手でそれを握ろうとしたが、俺と彼女の手はすっと互いの手を通り抜けた。……ハイテク技術ってやつはあまねく不気味である。

「極めつけはこれよ。スーツの右肩のボタンを押して」

言いながらダニエルはボタンを押した。その瞬間、彼女の姿が消えた。

「もう一度ボタンを押すと元に戻る。これで人目に触れず、歴史を変えることなくフィールドワークができるってわけ。分かった？」

ダニエルの姿がぱっと現れる。すげえ、これでダ・ヴィンチのシャワータイムを覗くことも可？

「残念ながら、声の消音化は未だ研究課題だから、おしゃべりは厳禁よ。最後に、緊急脱出装置の説明をするわ。万が一、命の危険や歴史への介入の恐れが生じた場合、強制的に未来へ帰る、その装置がこれ」

ダニエルが指し示したのは右手袋の手首の部分だった。よく見るとリング状のものが浮き出ている。

「これを右に回せば緊急脱出できるわ。ま、私くらい優秀なインストラクターがついていれば無用の長物だけどね。質問はない？」

俺は黙って肩をすくめた。ダニエルは頷き、朗らかに微笑んだ。

「フィールドワークはきっかり二時間よ。楽しみましょう」

俺とダニエルは腕を組み、エレベーターのような円筒形のタイムマシンに乗り込んだ。

「では、タイムワープ準備開始」

教授の声がスピーカーごしに聞こえ、白衣を着た三人の技術者がコントロールルームでタイムマシンを操作し始める。

「１４９０年、イタリア、ミラノ」

「時間軸、座標、ともにセット完了です」

「エネルギー充填、いつでも出発できます」

緊張で俺の胸はどきどきと鳴り、口が渇いて仕方なかった。俺の心の内を察したのか、ダニエルは頼もしげに微笑んだ。

「大丈夫よ、呼吸を楽にして」

レオナルド・ダ・ヴィンチ。天才と呼ばれた男。方々のことに手を出して、しっかり業績を残した万能人。それをこの目で、見る。

――そうすれば俺の生きる道も見つかるかもしれない。

「転送開始！」

教授が言い放つと、足元からぞわぞわと何かが這いあがり、俺の全身を包み込んだ。ぱっと目の前が暗くなり、次の瞬間には鮮やかなものが見えた。まるで巻き戻しの映像を見ているようで、目を凝らすと人のようなものや景色のようなものが現れては流れていった。これはきっと、人類の歩んできた膨大な歴史だ。

めまぐるしい景色に吐き気をもよおした俺の視界の端に、ちらりと黒いものが見えたのはその時だった。黒い竜巻のようだ。だんだんこちらへ近づいて来る。

「ダニエル、あれは？」

はっとダニエルの顔がこわばった。

「あれは……時空乱流！」

竜巻は雷をともなって目の前に迫っていた。

「飲み込まれたらどこへ飛ばされるか分からないの！アルベルト、緊急脱出装置を使って！早く！」

「き、緊急脱出装置って、肩のボタンだっけ？」

「右手首のリングよ！私には触れないから、早く！」

俺は右手を持ち上げ、特殊手袋のリングを左へ回す。何も起こらない。故障か？

「ダニエル、これ」

言いかけた時、俺たちはすでに竜巻に飲まれていた。

二

「ですから、楼主様（おやじさま）、これは、わっちの郷里の弟でありんす。はるばる江戸までやって来たのでありんすから、すこうしここへ置いてやっておくれなんし」

遠くで女の声がした。ちょっと変だけど、日本語だ。

いいにおい。化粧品のにおいがする。

「おまえがそこまで言うなら仕方ない。雑用くらいできるだろうから、男衆に面倒見させる」

今度は初老の男の声だ。

「ありがとうおざいます」

遠ざかる足音が頭に響く。いてえ。

日本なんて何年ぶりだろう。俺、何で日本にいるんだ？たしかフィールドワークに来たんじゃ……？

「おや、お目覚めでありんすか？」

木製の暗い天井とわけのわからない髪形をした人間の影が見え、俺は自分が寝かされていることに気が付く。そうだ、タイムワープの途中で時空乱流とかいう竜巻に飲まれて、その後……どうなったんだっけ？俺はがばっと起き上がった。

艶めかしい赤い提灯の光が障子の外から入って来ていて、暗闇をぼんやりと照らしていた。よく見ると小さな部屋に艶やかに着飾っ

た和服姿の女が座っていた。

「……お、花魁さん？」

頭に何本もの簪（かんざし）を差し、胸の下で大きな帯を結んだ姿は東洋史の資料チップで見たことがあった。

「おいらん……？わっちは天青太夫（てんしょうだゆう）でありんす」

天青太夫と名乗った女は実にきりりとした表情で微笑み、俺を興味深げにじいっと見つめた。

「あ、つうか、俺、何で見えてんだ？！」

――何にも触れてはならないし、誰にも姿を見られてはならない。私たちが足跡ひとつ残しただけで、歴史は変わってしまうのよ。

ダニエルが口を酸っぱくして言っていた言葉が脳裏に蘇る。まずい。

姿を消すボタンを探そうと俺は右肩をまさぐったが、そこにはざらりとした布の感触があるばかりだった。着替えさせられている。和服だ。

「お召し物はそこに」

天青太夫がすっと指し示した畳の上に銀色の特殊スーツがたたんで置いてあった。俺は慌ててそれをつかみ取り、両手で広げた。スーツは焼け焦げ、原形をとどめていない。姿を消すための右肩のボタンもなく、緊急脱出装置のついた手袋も指の部分しか残っていなかった。

「どうしよう、帰れねえ」
頭が真っ白になった。
辺りを見回したがやはりダニエルの姿はない。
「――竹取物語を知っておりなんすか？」
動揺する俺とは対照的に、天青太夫は優雅に言った。
俺は頷いた。確か、竹から生まれた女の子が鬼退治して月に帰るとか、そんな昔話だった気がする。いや、何か別のもん混じってるか？
「どこからおいでなんしたかは存じませぬが、じきに迎えが来るでありんしょう」
そうかもしれない。行方不明になった俺やダニエルをＩＳＵが放置するとは思えない。何らかの捜査方法でいつか見つけてくれると今は信じるしかない。
いつかきっと。
気が遠くなった。
「……あんたが俺を助けてくれたのか？」
「助けたと言っても、着替えさせて布団に寝かせただけでありんすよ。主様はわっちのこの部屋に突然現れなんしたのでおざんすから」
ほほほと天青太夫は口元に手を当てて笑った。それって普通の女ならすっごくびっくりするんじゃないだろうか。
「主様の身体は炎に包まれておりなんしたけんど、不思議なことに、

主様は身体のどこにも火傷を負っておりんせん。ほんに不思議でありんす」

俺は手の中の特殊スーツに視線を落とした。時空乱流に飲まれ、時空を吹き飛ばされても怪我ひとつ負わなかったのはこのスーツのおかげなんだろう。

「ここはどこだ？」

「ここは江戸の遊郭、吉原でおざいます」

江戸は東京の昔の呼び名だ。やはりここは日本なのだ。

俺は立ち上がって窓を開け、外の様子を窺った。赤い提灯が店の軒先にずらりと並んだ大通りを大勢の男たちが行き交い、人々の喧騒は二階からそれを見下ろす俺の耳にさえ届いた。

「江戸時代……？」

俺は生まれてから小学校までを日本で過ごした。小学校で習った大まかな日本史を思い返す。もし今が江戸時代なら、ここは十七世紀か十八世紀、もしくは十九世紀。

「ええっと、そうだ、関ヶ原の戦い！関ヶ原の戦いって何年前の出来事だ？」

俺が身を乗り出して訊ねると、天青太夫は意味ありげに目をすがめて答えた。

「今日は明暦三年一月四日。天下分け目の関ヶ原はもう五十年も前のことでありんすよ」

ということは、今は十七世紀半ば。江戸時代初期だ。
十五世紀のミラノへ行こうとして、十七世紀の江戸に飛ばされているとは、ＩＳＵも簡単には分からないだろう。俺は頭を抱えた。
俺は本当に帰れるのだろうか。

「楼主様はわっちが説得しなんしたゆえ、迎えが来るまでの間、わっちの弟と名乗って店の雑用をしながら暮らせばよろしゅうおざんす」

俺の心を読んだかのように、天青太夫は涼しげに言った。

「ありがとう。俺はカンバヤシだ。……でも、何でそんなに良くしてくれるんだ？」

目の前に突然現れた得体の知れない人間の面倒を見てくれる女なんてこの世にそういるものではない。それどころか、彼女は俺がどこから来た何者なのか聞こうともしない。

「わっちには郷里に弟がありんす。無事に育っていれば、ちょうど神林様くらいの歳になりうんす。何だか放っておけないのでありんすよ」

柔らかく微笑み、懐かしいものでも見るような目で天青太夫は俺を見た。

「それに……」

天青太夫が言いかけた時だった。

「姉様、よろしゅうおざいますか」

ふすまの向こうから、鈴を振るような声がした。

「お入りなんし」

天青太夫が答えると、すっと、ふすまが開いた。

「失礼致しんす」

現れたのは十五六歳の少女だった。俺はぽかんと口を開けてしまった。まるで妖精のように透明で白い肌、潤んだ漆黒の瞳、つややかな黒髪、可憐でいて聡明そうな表情、かすかに匂い立つような色気、彼女の持つ何もかもに吸い込まれそうだった。

「神林様、これはこの夕蓮楼の引き込み新造、残月でありんす」

「ヒキコミシンゾウ？」

俺はぼんやりしたまま首を傾げた。

「半人前の遊女見習いの中でも一番優秀な者のこと。いわば未来の太夫でおざんす」

きりりと誇らしげに答え、天青太夫は少女を促した。

「残月でおざいます。お膳のご用意ができなんした。どうぞ遠慮なくお上がりなんし」

そう言って残月と呼ばれた少女は小さなテーブルのようなものをそっと畳に滑らせた。いくつもの小鉢に分けられた立派な食事が乗っている。俺は急に強烈な空腹感を覚えた。そういえばタイムワー

プのために一日絶食していたのだ。

「いただきます」

畳の上に腰を下し、子供のころに習ったように手を合わせて俺は箸をとった。

しばらくの間、黙々と食事をする俺を、二人の女性が見守っていた。やがて俺が箸を置くと、すっと残月がお茶の湯のみを差し出してくれた。

「神林様は未来からおいでになったのでありんしょう？」

天青太夫の突然の言葉に、俺は口に含んだばかりのお茶を吹き出しそうになった。

「な、な、なんで分かったんだ？！」

「わっちは吉原の太夫でありんす」

天青太夫は妖艶に目を細めた。

「突然、神林様が目の前に現われなんして、最初は天人か妖かと思いなんしたけんど、天人ならば空からお越しになるはず、しかし妖には見えんせん。その不思議な衣装といい、神林様の言動といい、未来のお人ではないかと思ったのでありんす」

天青太夫は実にきっぱりと言った。

「神林様をお助けするのは好奇心ゆえ。それもありんす」

気持ちがいいほど正直な人だ。俺は妙に感心してお茶をすすった。

「未来はどのようなところなのでおざんすか？」
「ええと、月に行けたり、月の隣に大きな街を浮かべて、そこで勉強したり」
「神林様は月に行かれたことがおありで？」
「まあな。でもそんないいもんじゃないぜ。埃っぽくって」

二人の女性は顔を見合わせて驚いている。
月は荒野だ。それよりも、宇宙から眺める地球の方がよっぽど美しい。と、言っても分からないだろうなあ。彼女たちはこの青い水の惑星の写真さえ見たことがないのだ。

「太夫、茶屋にお客様がおいでだよ！」

ふすまの向こうからきびきびとした老婆の声がした。天青太夫はさっと立ち上がって着物の長い裾を返した。

「残月、神林様をお相手さし上げなんし」
「あい、姉様」
「では神林様、ご不明なことがあれば何なりと残月に聞いておくれなんし」

颯爽と部屋を出て行く天青太夫の後ろ姿を目で追いながら俺は残月に訊ねた。

「君は姉さんについて行かなくていいの？」
「おいらは引き込み新造。楼主様付きの新造でありんす。姉様には姉様付きの二人禿がおりんす」
「カムロ？」
「百聞は一見にしかず。よろしければ、天下の天青太夫の滑り道中

を見物しに参りんせんか？」
「スベリドウチュウ？」
「店から茶屋へ、太夫が大通りを練り歩くことでありんす。さあ」
残月に腕を引かれ、俺は立ち上がって彼女の後を追いかけた。暗い廊下と階段を経て裏口のようなところから下駄をつっかけて外に出る。ひんやりとした宵の空気が頬を撫で、寒椿が強く香る庭を横切ってくぐり戸を抜ける。細い路地から大通りへ出ると、すでに人だかりができていた。
「神林様、これが夕蓮楼の天青太夫の滑り道中でありんすよ」
ゆっくり、ゆっくり。一歩、また一歩。
豪華絢爛な着物をまとい、とんでもなく底の厚い履物を履いた天青太夫が這うようにねっとりと大通りを進む。彼女の背後には傘を持つ若い男が一人、彼女の左右には十歳くらいの女の子が二人、やはり着飾ったなりで付き従っていた。
「姉様の左右に幼い子供がおりんしょ。あれが禿でありんす。姉女郎の世話やお客様のお相手をしながら一人前になるために芸事を学んでいる子供でありんすよ。禿は大きくなると新造になりんす。おいらも昔は姉様の禿でありんした。けんど、十二歳の時に引き込み禿に選ばれて、今では引き込み新造でおざんす」
「新造が大きくなると何になるんだ？」
「なれるものは一人前の遊女になりうんす。太夫、格子、局、端……遊女には様々な位がおざいます。けんど、この吉原には太夫は三人しかおりんせん。太夫になるということは、吉原遊女二千人の頂点に立つということでありんす」

残月はそう言って口元をほころばせた。彼女が天青太夫を見つめる瞳には強い憧れや誇らしさが見えた。
天青太夫は群衆には見向きもせず、つんとすました表情で俺たちの前を通り過ぎて行った。彼女の背中が遠ざかると男たちは称賛のため息をつきながら方々へ散り始めた。

「天青太夫がすごいってのは分かったよ。未来の太夫である君がすごいってことも」

そんな彼女たちに助けてもらったことは果たして幸運なことだったのだろうか。

「あい、おいらも姉様のような立派な太夫になりうんす」

残月の妖精のような顔を見ると、大きな黒い目がきらきらと輝いていた。俺は思わずそれに見とれてしまった。こんな風に将来を語る女の子を、俺は初めて見た気がする。

「神林様、おいらの顔に何かついておりんすか？」

急に残月の顔が俺の方を向いたので、俺は慌ててあさっての方向を見た。そして背後が何やら騒がしいことに気が付いた。男の悲鳴と女の怒号が聞こえる。

「あれ、何だ？」

見ると、夕蓮楼の隣の店の前で、小綺麗な着物を着た若い男が地面に這いつくばり、その周りを取り囲んだ五人の女たちに暴行を受けている。

「おそらく、馴染みの女郎以外に手をお出しになったのでありんしょ」

そう言って残月は眉をひそめる。

暴行を受けていた男はとうとう小刀で髷(まげ)を切り落とされてしまった。

「見せしめの髪切りでありんす」

「過激だな……客にあそこまでするか？」

三十一世紀なら考えられないことだ。

「吉原には、女郎にも客にも厳しい決まりがおざいます。双方がそれを守らねば、この街は成り立たぬのでおざんすよ」

残月は険しい表情をつくって唇を引き結んだ。

「おいらたちも幼き頃より言い聞かされなんした。脱走、密通、怠慢……御法度に触れれば子供だろうと容赦なく折檻されて、どぶ板長屋の河岸店に売られるか、酷い時には命を落として投げ込み寺へやられることもありなんす」

話しながら、俺と残月は夕蓮楼に戻った。

「吉原って怖いんだな」

残月は苦々しげに笑った。

「華やかな苦界でおざいますよ」

毎日お稽古ごとがたくさんあるが、今日は暇なのだと言って残月は俺を庭に連れて行ってくれた。縁側に並んで座ると、店の中から三味線の音色や女たちの笑い声が聞こえた。俺たちはしばらく黙ってそれを聞いていた。

俺、本当に江戸時代に来ちまったんだなあ。

しみじみと絶望してみたが、どこかで開き直っている自分もいる。

「なあ、お稽古って、何するんだ？」

沈黙に耐えかねて訊ねると、残月は明るい表情で微笑んだ。

「それはもう、たくさん！三味線、琴、鼓、茶、書、香、華、礼法……楼主さまの碁のお相手や、和歌や古典、算術も学んでおりなんす。引き込み新造は他の禿や新造より多くのことを学ばなければならないのでありんすよ。太夫になれば、どこぞの国のお殿様のお相手をするやもしれんせんゆえ」

「大変なんだな」

俺も天才少年とか言われて育ったものだが、残月とは次元が違うような気がして、何のひねりもない相槌しか出てこなかった。

「神林様は未来では何をしておいでだったのでありんすか？」

俺は頭をかいた。

「ええと、歴史を勉強したり、歌を歌ったり」

「まあ。では将来は学者先生におなりでおざんすか？それとも歌人に？」

「いや、何も考えてね。親父が医者で、跡を継げって言われてるんだけど、それも嫌だし。かと言って他にやりたいこともねえし」

俺はため息をついて夜空を見上げた。未来の空より何百倍も暗い空には細い月が浮かんでいた。三十一世紀の空にはＩＳＵの影が見えるが、もちろんここの空にそんなものはない。ここは本当に江戸なのだ。

「いざ　かぐや姫　穢き所にいかでか　久しくおはせん」

物足りない夜空をぼんやり眺めていた俺の隣で残月が何かを暗唱した。

「え？」

月光を浴び、残月は柔らかく笑った。

「神林様はかぐや姫のようでありんすね。かぐや姫も、故郷の月を眺めては物思いにふけるのでありんすよ」

「竹取物語？」

天青太夫も竹取物語の話をしていた。竹取物語のように、俺にもいつか未来から迎えが来るだろうと。

俺はもう一度月を見上げた。ＩＳＵが、未来が、ひどく遠く思えた。

三

目の前に、ずらり、ネクタイを締めた大人が三人、長机についている。

『アルベルト君のお父さんは、お仕事は何をなさっているのかな？』

俺の父ちゃんはお医者さん！すっげーだろ！なーんでも治しちまうんだぜ！

俺は大声で言って、左右に座る両親を誇らしい想いで見上げる。

すみません、ちょっと口の悪い子で。

両親は困ったように、けれど嬉しそうに微笑む。

『アルベルト君は将来、何になりたいの？』

お医者さん！俺もお医者さんになります！

ランドセルを背負って満開の桜のトンネルを歩いている時だった。

『アルベルト、小学校を卒業したら、ドイツのおじい様のところで暮らしましょう』

手をつないでいた母が突然そう切り出した。

え、と俺は言った。

『お父様は来ないわ。お母様と二人で行きましょう、ね』

俺は聡い子供だった。俺は答える代りに黙って母の手を握りしめた。

『ごめんなさい。ごめんなさいね、アルベルト』

すすり泣く母の涙を止める方法が何なのか、俺はひたすらそれを考えていた。

喪服を着て冬枯れた銀杏並木を歩いている。

『アルベルト、母さんのことは……残念だった。今までおまえにも随分苦労をかけたな』

少し離れたところを歩いていた父が黒いネクタイをゆるめながら言った。

『それよりおまえ、ＩＳＵに入学したんだってな。大丈夫だ、この先の学費の面倒は見てやる。三年生になったら、当然、医学部に進むんだろう？』

え、と俺は言った。

『おまえは手先が器用だから外科に向いている。おまえが俺の病院を継ぐのを楽しみにしてるからな』

ぱん、と父が俺の肩を叩いて笑った。

目の前に、薄らと凍った白い一本道が広がっていた。

「おい、起きろ、新入り」

誰かに頭を蹴られ、俺は眠りの世界から現実へ引き戻された。昔の夢を見ていたような気もしたが、そんな余韻に浸る間もなく布団をはがされた。冷気が全身を包む。寒い。

「いつまでも寝てると番頭さんにどやされるぞ」

バントウ？

俺は寒さに耐えかねて身を起こした。

目を開けると障子の向こうから橙色の朝日が差していた。だが、まだ辺りは暗い。室内には大した家具はなく、自分がだだっ広い雑魚寝部屋で眠っていたことを俺は思い出した。

ここは江戸時代初期の吉原。

昨夜、眠りに就く時、目を覚ましたら未来へ戻っていればいいのにと思いつつ目を閉じたものだが……。

「そううまくはいかねえよなあ」

俺は白いため息をついて頭を抱えた。

「ぶつぶつ言ってないで支度しろ。仕事だ」

支度と言っても寝間着を脱いで、昨日着ていた着物に着替えるだけだ。腹が減っていてよろよろする。仕事とやらの前にコーヒーでも飲みたい気分だ。

「おまえ、太夫の弟なんだってな。おれ、おまえの面倒見るようにって楼主様から言われてんだ」

俺を起こした男はそう言って、そばかすが浮かんだ顔ではにかんだ。俺と同じくらいか少し年上の日焼けした男だ。

「よろしく。俺はカン……」

カンバヤシと言おうとして、俺は口をつぐんだ。天青太夫の弟なら、当然、彼女と同じ名字のはずだが、俺は彼女の本名を知らない。（だいたい名字なんてあるのか？）

「カンか、よろしくな、おれは礼。じゃ、まずは風呂掃除だ。いいか、女たちは泊りの客を見送ったらもう一度寝床に戻る。そして女たちがまた起き出して来る前に、風呂を綺麗にしておかなきゃならねえって寸法だ」

説明しながら、礼は廊下をきびきびと歩き、俺を大浴場へ導いた。二十人が余裕で入浴できそうな大きな風呂だ。ここを掃除するのは骨が折れるだろう。

「さ、やっちまおうぜ」

礼が促し、俺たちは着物の裾をまくって、冷水で湯船やすのこを洗い始めた。真冬の水は氷のように冷たく、手や足がかじかんで真っ赤になった。水を裏庭の井戸からくんでくるのも一苦労だ。こんな重労働は、未来にいた時にはしたことがなかった。

掃除が終わり、湯船に水を張ると、今度は薪を割って風呂を沸かした。もちろん初体験だ。使い慣れない重い刃物で割った薪をかまどにくべ、頭をくらくらさせながら竹の筒に息を吹き込み火を大き

くしていると、背後で礼が言った。

「廓の風呂は仕事を終えた女たちが身体を綺麗にするところだ。心をこめてわかせよ」

風呂を沸かし終えたところでようやく朝食をとった。白い粥と何かの漬物だけの質素な食事で、到底腹に力の入るようなものではなかった。

「まいど、景気はどうですか」

そんな掛け声とともに食材売りや小物売りが訪れ始めたのは日が随分高くなってからだ。その日、初めて残月と顔を合わせたのは貸本屋がやってきた時だった。

「本をお持ちしましたよ」

大荷物を背負った若い男の声を聞きつけ、残月は小走りに玄関へ現れた。俺はちょうど店の表を掃除していたので、彼女の姿がちらりと見えた。

「はい、残月さん、源氏物語の続きです」
「ありがとうおざいます」
「他にいるものはないですか」
「新しい算術の本はありなんすか？」
「申し訳ありませんが、残月さんはうちの算術の本はみんな解いてしまわれましたよ。また新しいものを見つけたらお知らせします」
「では、月や星の本はありなんすか？」
「月や星？」
「あい。異国の学者様は月や星を遠眼鏡で見るのでありんしょ？そ

ういう本はおざいませんか？」

残月の要望に、貸本屋は困ったように唸り声を上げた。

「一応探してはみますけど、期待しないでくださいね」

貸本屋が荷物をまとめて出て行くと、俺は残月の前にひょこっと顔を出した。

「よ」

「まあ、神林様、お掃除でありんすね」

胸に本を抱えた残月は初めて会った時よりラフな着物を着ている。まだ営業時間じゃないからかな。

「そ。朝から掃除ばっかで正直かったりーぜ」

俺は手に持った箒をくるりと回して見せた。残月はふふふとおかしそうに笑った。

「残月は月や星のことを知りたいのか？」

「あい。神林様は月に行ったことがあるのでおざんしょ。おいらも行きとうありんす。けんど、おいらは吉原から出られんせんゆえ、知識だけでも得たいのでおざいます」

真っすぐな瞳で微笑み、それから残月は胸に抱えた本に頬を寄せた。

「おいらは、もっともっと学びとうありんす」

いまどき、ＩＳＵにだってこんな子いないぞ。
俺は無性にどきどきした。

「残月はさ、色んな習い事をしてるだろ。それと同じように、俺が残月に色んな事教えるってどうだ？月や星や、未来のことも過去のことも、異国のこともさ」

思いつきで言ってから何ていい考えだと俺は思った。ダニエルが聞いたら怒るかもしれないけど、俺はこれが残月と親しくなる方法として最適な案だと思った。

「誠でありんすか？！」

案の定、残月は大喜びで俺を見上げた。俺は胸を張る。

「おう。男に二言はねえ」
「カン！何さぼってんだ！」

礼の咎める声が背後から聞こえ、俺は慌てて残月から離れた。

「では、時間と場所を考えておきうんす！」

俺と残月は微笑みあって別れた。

それから髪結いがやってきて女たちの髪を整えて行くと、お昼の営業が始まった。昼間の営業のことを昼見世、夜の営業のことを夜見世というのだと礼が教えてくれた。昼見世はあまり賑わうものではないらしく、女たちは手紙を書いたり本を読んだりして思い思い

の時間を過ごしているようだった。
夕方、女たちが食事を済ませると吉原全体に赤い提灯が灯された。夜見世の始まりだ。俺たち男衆の仕事といえば太夫の道中で傘を持つとか、店の前に立って客引きをするとか、集金係のようなことをするとか、非常に地味だ。
それに引きかえ、女たちは堂々としていて派手で、とにかくかっこ良かった。

夜が更け、大門が閉められると営業は終わる。客のついた遊女もつかなかった遊女も就寝時間となり、辺りはしんと静まり返った。俺たちも床につき、再び朝を迎えるまで眠りにつく――はずだったが、俺はひとり、雑魚寝部屋でむくりと起き上がった。
そろりそろりと部屋を抜け、暗い廊下を経て目的の部屋の前までやって来る。

「残月」

障子に顔を寄せて囁くと、すぐに残月が顔を覗かせた。

「神林様！」

寝間着姿の残月は口元を手で覆い、目を丸くする。

「講義してやるって言ったろ」
「こんな夜更けに？」
「だって残月、ずっと忙しいんだろ。俺も昼間は仕事あるし」

休日なんてそうそうないだろうし。
残月は一瞬、困ったように逡巡してから頷いた。

「では、場所を変えましょう。おいらの部屋は楼主様の部屋に近うありんす」
「楼主様に見つかるのはやっぱまずいのか？」
「男衆と親しくすることは禁じられておりなんす。まして真夜中に密会しているところなど見つかればただでは済みんせん」

そんなリスクを冒してまで俺の話を聞きたいのか。残月に導かれて廊下を歩きながら、俺は小さくショックを受けた。俺たちの時代ではもはや常識でしかないことも、彼女にとっては得難い知識なのだ。

「こちらへ」

連れて行かれたのは庭の片隅に建てられた古い物置小屋だった。戸を閉めて二人が座ると少し窮屈なくらいの広さで、残月が小さな窓を開けると月光が明るく屋内を照らした。

「子供の頃、粗相をするとよくここに閉じ込められなんした」

懐かしそうに辺りを見回す残月の顔が今までで一番至近距離で、俺は高鳴る心臓の音が彼女に聞こえやしないかとひやひやした。

「何から話そうか」

俺がわざとらしく咳払いして切り出すと、残月は可愛らしく首を傾けた。

「神林様の住んでいるところはどのようなところでおざいますか？」
「俺が住んでるのはＩＳＵの……いや、まず、地球と月と宇宙の話をしよう」

「ちきゅう？うちゅう？」

残月はきょとんとして目を瞬かせた。

「俺たちがこうして暮らしているこの世界は、地球という丸い大きな星なんだ。地球は約七割を海で覆われているから、月から見るとまるで宝石みたいに真っ青に輝いてて、すごく綺麗なんだぜ。月は地球の周りを回るでかい石ころで、太陽の光を反射して光ってるんだ。俺の住んでる街も地球の周りをぐるぐる回ってる」

「……難しゅうおざんすねえ」

心底困り果てたような顔で残月は力なく笑った。

「……だよな」

俺も困った。江戸時代の人に宇宙や未来のことを説明するのは想像以上に難しかった。

その時、じゃらん、じゃらん、という重たい金属音がどこからともなく聞こえてきた。残月がはっとしたように息を潜めたので、俺もそれに倣う。ゆっくりと音が近づいてきて、やがて遠ざかっていくと、残月がほっと息をついた。

「あれは火の用心の鉄棒引きでありんす。吉原は火事が多いのでおざいます」

夜遅くまで火を使うからだろうか。

「神林様、今夜は戻りましょう。神林様のおっしゃることを理解するには、すこうし時間が必要でありんす」

にこりと笑い、残月は腰を上げた。

「次はいつ会える？」

俺も立ち上がりながら、彼女の表情をうかがう。俺の話が意味不明過ぎて、嫌気がさしたりしていないかな。

「今日は五日でありんす。次の奇数の日の夜にお会いするのはいかがでおざいましょう」

「おう、奇数の日な」

二日に一度、残月に会える。俺は喜びを噛みしめながら微笑んだ。

「では、どうぞ先にお戻りなんし。一緒にいるところを誰かに見られては面倒でありんす」

物置小屋から出ると月光に照らされた庭が明るく感じられた。俺はうきうきしながら寝床に戻り、残月との次の逢瀬を楽しみに眠りについた。

四

吉原で暮らし初めて十日経った一月十五日、俺と残月はその夜も講義に取り組んでいた。小さな物置小屋での密会は楽しく、いつもあっという間に時間が過ぎる。

「そろそろお開きにいたしましょうか」

終わりを切り出すのはいつも残月だった。俺はそれがとても悲しい。

「月が綺麗だ。今夜は満月かな」

まあるい月を指し、俺は残月との時間を引き延ばそうとする。この時間だけを楽しみに、俺は毎日働いているのだ。

残月は物置小屋の窓から見える金色の月と俺の顔を澄んだ目で見比べた。

「未来へ帰りたいのでおざいますね？きっと神林様の身を案じている方がたくさんおいでなのでありんしょう」

一瞬、親父の顔が浮かんだ。そして友達や教授やダニエルの顔。

「あいつら、心配なんてしてねえよ」

「でも、親御さんはおいでありんしょう？」

「おふくろは三年前に死んだ。親父は生きてるけど別々に暮らしてんだ。ひょっとしたら跡取り息子がいなくなって焦ってるかもしれないけど、あいつは俺の心配なんて」

しねえよ、と言おうとして、胸の中で何かがこつんと音を立てた。

『おまえが俺の病院を継ぐのを楽しみにしてるからな』

父の声が頭に響き、俺ははっとした。

「神林様は何故、お医者様になりたくないのでおざいますか？神林様には才能がおありなのでありんしょ？」

「何故って……」

俺はしばしうつむいて思案した。頭の中をどう探しても、家を継ぎたくない明確な理由は見つからなかった。ようやく見つかったのは何だか言い訳みたいな言葉だ。

「だって、何か嫌だろ？たまたま医者の家に生まれたからって、継げって言われるままに病院継ぐの。まるで、生まれる前から俺の人生が決まっていたみたいじゃねえか」

生まれてから死ぬまで、決められた一本道のような人生。そんなの御免だ。

「俺は運命に逆らって、思い切り足掻いて、自分で自分の道を切り拓きたい。そりゃ、まだ、やりたいこと見つかんねえけどよ」

何がやりたいのか分からない。何をすべきか分からない。残月たちからしてみれば、贅沢な悩みなのかもしれないが、親父の言いなりになることだけは癪だった。

「おいらのおっかさんも吉原の女郎でありんした。おいらはこの吉原で生まれ、吉原で死ぬさだめ。けんど、神林様のようには思いん

せん」

残月は目を伏せて微笑み、それから意志の強そうな目を開けて言った。

「たとい、ここから逃れ別の人生を歩んだとしても、それもまた苦難に満ちた戦いの日々。さだめに従うも戦、逆らうも戦。人生とはあまねく戦なのでありんしょう。ならばおいらは逃げも隠れもいたしんせん。ただ己に誇れるように、勝っても負けても顔を上げて笑って見せうんす」

そう言い切ると、残月は勝気に微笑んだ。その姿があまりにかっこ良すぎて、自分の言い訳じみた考えがあまりに情けなさすぎて、俺は年下の少女に劣等感を抱いた。

「……遊女になるの、嫌じゃないのか？」

好きでもない男に金で買われ、弄ばれる人生なんて、俺だったら耐えられない。まともな男のもとへ嫁いで子供を産み育てる、それがこの時代の女性の幸せなのではないだろうか。

だが、残月は静かに首を横に振った。

「戦に好きも嫌いもおざんせん。神林様は……逃げているだけでありんす」

残月の言葉は俺の胸にぐさりと突き刺さった。そんなこと、今まで誰にも言われなかった。

「……かもな」

逃げて逃げて、こんなところにまで来てしまった。

「あ、雪」

残月の声に導かれて顔を上げて窓の外を見ると、暗い空からちらり、ちらりと白い雪が舞い降りてきていた。

「成すべきことというものは、こんな風にある日突然降って来るものではおざんせんよ、神林様。神林様はお医者様になるべきだと、おいらは思いうんす」

残月の妖精のような瞳で真っすぐ見つめられ、俺は戸惑った。絶対に医者になるもんかと言い張っていた自分の心が、こんなに簡単にぐらつくなんて思ってもみなかった。

『アルベルト君は将来、何になりたいの？』

小学校の入試の面接で質問された問いかけがふと頭をよぎった。

――お医者さん！俺もお医者さんになります！

あの時はきっぱり、はっきりとそう答えられた。父が誇らしくて、大好きだった。俺はいつから父を避け、嫌うようになったのだろう。

『ごめんなさい。ごめんなさいね、アルベルト』

俺の小学校卒業と同時に、両親が離婚することになった。よくある性格の不一致ってやつなのか、母が日本の生活に馴染めなかったせいなのか、原因ははっきりしないが、母はいつからか泣いてばかりいる人になっていた。俺が父を疎ましく思い始めたのはその頃か

らだろう。母を泣かせる父と同じ職業になど就くものかと、医者になりたいという俺の夢はしぼんでいった。
俺は母と一緒に日本を去り、ドイツへ渡った。そしてＩＳＵに入学して間もない大学一年の冬に母が事故で死んだ。葬儀にやって来た父は俺がＩＳＵに入学したことを何故か知っていて、嬉しそうに言った。

『おまえは手先が器用だから外科に向いている。おまえが俺の病院を継ぐのを楽しみにしてるからな』

父の笑顔と、目の前の残月の笑顔が重なる。

「きっと人生は、どの道を選ぶか、ではおざいませんよ。人生は、どう戦うか、でありんす」

その晩、俺は再び、医者になるという未来を本気で考え始めた。

明暦三年一月十八日。
それは江戸中を空っ風が吹き抜けた日だった。

「うー喉いてえ」

からからに乾燥した昼下がり、俺は庭の掃除をしていた。箒で落ち葉を集めても強い風がびゅうびゅうと吹いてちっとも片付かず、頭にきて掃除の手を止め庭石に腰かけた時だった。縁側に天青太夫がぴんと背筋を伸ばして立っていて、俺をじっと睨んでいることに気が付いた。

「神林様、お話がおざいます、こちらへ」

入浴と化粧を済ませ、すでに昼見世の準備を整えた天青太夫がそう言って俺を手招いた時、俺は心底ぎくりとした。俺は黙って彼女に従い、天青太夫は硬い表情で自室の障子をすっと閉め切ると、俺と差向いに腰を下した。

「近頃、夜な夜な残月と会っておいでおざんすね？」

単刀直入に切り出され、俺の心臓はばくばくと鳴った。

「御法度と知った上での行いでありんすか？」

きっと俺を見据える天青太夫に、俺はどうにかこうにか答えた。

「知ってる。だけど、俺は残月が好きだ」

「おやめなさい、神林様。女郎に恋をするは茨の道でありんす」

天青太夫は眉間にしわを寄せ、低く抑えた声音で言った。まるで俺に同情しているかのような、俺を憐れんでいるかのような、そんな表情だった。

「今、わっちの身受け話と吉原の移転計画が進んでおりなんす。それに合わせて、あの子の太夫襲名が決まったのでありんすよ」

タユウシュウメイ。

一瞬の後に俺は事の次第を悟った。

「一人前の女郎になるということがどういうことか、分からないわ

けではのうおざんしょう」

俺は愕然とした。

残月が俺の手の届かないところへ行ってしまう。そればかりか、成金の親父だの強欲な商人だのに汚されてしまう。

「そんなの、絶対、嫌だ！」

叫ぶなり、俺は天青太夫の部屋を飛び出し、草履をつっかけて店を飛び出した。どうしようもなく我慢できなかった。この世の何もかもが理不尽に思えて仕方なかった。

「アルベルト！！」

大門の近くまで走ったところで、横合いから聞き覚えのある声がした。

「ダニエル？！ダニエルか？！」

俺は立ち止まって必死に辺りを見回した。姿は見えないが、確かにインストラクターのダニエルの声がした。ついに迎えが来たのだ。心が躍った。

「ダニエル！どこだ！」

「ここよ、今、姿を消しているの。人気のない裏道まで誘導するわ」

とん、と姿の見えないダニエルに背中を押され、俺は無人の細い路地まで連れて行かれた。

「よかったー！！やっとやっとやっと見つけたー！！」

姿を現すなり、ダニエルは俺の首にしがみついてきた。
「大丈夫？怪我とかしてない？」
「してねえよ、してねえから放せ！」
残月のこと、迎えが来たこと、帰りたい気持ち、ここに残りたい気持ち。
まぜこぜになって、俺の頭は混乱していた。
思わずダニエルの手を振り払うと、彼女は目を吊り上げて憤慨した。
「何よ！人が必死で探しまわって、やっとのことで見つけてあげたのに！フィールドワーク中に行方不明者が出た、ってＩＳＵだって大騒ぎなんだから！地球からマスコミやら保護者やらが殺到して、学長も教授陣も大迷惑被ってんのよ！」
「俺のせいだってのか！」
「君のせいに決まってるじゃない！緊急脱出装置のリングは右に回せって言ったでしょうが！左に回したのはだ・あ・れ？！」
「じゃあ、『私くらい優秀なインストラクターがついていれば無用の長物だけどね』とか言ってたのは誰だ！」
「仕方ないでしょ！時空乱流に出くわしたのは私の実力と関係ないもの！」
かんかんかんかん！
言い争う俺とダニエルの怒鳴り声をかき消すように、不穏な鐘が鳴り響いた。
「何の音だ？」
「半鐘よ。……始まったわね」

わああっという人々の悲鳴が聞こえ、建物が崩れる音がした。黒い煙がもくもくと空へ昇って行くのが見え、辺りに火の粉や灰が舞い始める。

「これは明暦の大火と呼ばれる日本史上最大の大火事になるの。江戸の半分以上が焼け落ちて、何万人という人が亡くなるわ。この吉原も焼ける。早くスーツを着て。未来へ戻らなくちゃ」

タイムワープ用の特殊スーツを手渡されたものの、俺は動揺してどうしていいか分からなかった。

「ちょっと待ってくれ！俺、すぐには帰れねえよ！世話になった人がたくさんいるし、その人たちを無事に逃がしてからでもいいだろ？」

「君はもう十分歴史に干渉しているの。今までのことは不可抗力として許されても、これ以上は、あっ、こら！」

火の粉を振り払い、俺は夕蓮楼へと駆け出した。

「こら、馬鹿ベルト！もうっ世話が焼けるんだから！」

何だかんだ言いながら、ダニエルは姿を消してついて来ているようだった。

「残月――っ！！」

赤い炎に飲み込まれつつある花街を俺は必死で走った。煤や灰で全身が黒く汚れ、あちこちに火傷をつくりながら、俺は残月の姿を探した。

「残月――っ！！」
「神林様、ご無事でありんすか！」

走りながら、俺は意を決していた。だから残月を見つけた時、俺はすぐさまそれを提案した。

「残月、よく聞いてくれ。この火事で江戸中が燃える。吉原も焼け落ちる。逃げるなら今だ！」

残月は眉根を寄せて目を見開く。

「未来から迎えが来たんだ。だから残月も俺と一緒に未来へ行こう！さだめに従っても、逆らっても、どっちにしろ戦だって言うんだろ、だったら逆らってもいいじゃねえか！残月の生き方はかっこいいけど、かっこいいだけだ！」

俺は残月の両肩をつかんで揺さぶった。

「俺と行こう！未来に行けば何にも縛られず、行きたいところどこへでも行けんだ！月だって、宇宙だって、富士山の天辺だって！それに、残月が学びたいことは何でも学べる！知りたいことは何でも分かる！」

言いながら俺は困惑していた。どう考えても、未来は残月にとって吉原よりマシだ。マシなはずだ。だが、なぜか残月は怒ったように目を吊り上げ、口を引き結んでいる。

「幸せになりたいとか、思わないのか……？」

沈黙が降りた。
建物が燃え、崩れ落ちる音が響き、逃げ惑う人々の悲鳴がこだまする。
やがて、残月は静かに口を開いた。
「神林様、確かにおいらの生き方は恰好がいいだけかもしれんせん。けんど、おいらはどうしても逃げたくないのでありんすよ。それは恰好つけではおざんぜん。もしもここから逃げ出せば、おいらは誇りと夢を失いうんす。そしてそれは、大好きな姉様やおっかさんの生き方さえ否定するようなもの。こう見えて、おいらは必死なのでありんすよ。とても恰好などつけている余裕などおざんせん」
そう言って、残月は火事などものともしないような仕草で優雅に微笑んだ。
それは間違いなく、太夫たる者の貫録だった。
「神林様、逃げるばかりが道ではありんせん。何にも縛られないことが必ずしも幸福とも限りんせん。おいらはこの吉原で生まれ、吉原で死ぬ覚悟。どうか神林様も自らのさだめと戦っておくれなんし」
言いながら、残月は俺の小指に自分の小指を絡めた。
「おいらはこの火事を生き延びて、姉様のような立派な太夫になりうんす。だから約束しておくれなんし。未来へ戻り、立派なお医者様になると。神林様はお父上の生き方を否定したいわけではないのでありんしょ？」
「……うん」
俺が答えると、残月は満足げに頷いた。姿の見えないダニエルに小突かれ、俺は渋々タイムワープ用の手袋を右手にはめた。この手

袋の手首のリングを右に回せば、俺は未来へ戻れるのだ。

「神林様はひとつ、誤解されておりなんす。こんなことを言える女郎は一握りでおざいます。おいらは太夫になりうんす。太夫は己の意思でのみ自らの帯を解きなんす。他の女郎はそうは参りんせん。おいらはずるいのでありんすよ」

苦々しく笑い、残月は胸に手を当てて目を伏せた。

「神林様が一緒に行こうとおっしゃってくれなんしたこと、決して忘れんせん」

何にも触れることのできない俺の手袋に残月のほっそりとした白い手が伸びる。

すり抜ける手と手。

残月の顔がはっと悲しげにゆがむ。

俺は思い切って手首のリングを右に回した。

「本当は……本当は、一緒に行きとうありんした！！」

残月が大声を上げるのを、俺は初めて見た。

彼女が涙を流すのも。

「神林様あ！！」

目の前が暗くなる。鮮やかなものが流れるように通り過ぎて行く。

人類の歩んできた膨大な歴史。

意識が遠のく。

「アルベルト！」

まるでトンネルから出て来たかのように全身が白い光に包まれ、倒れ込んだ俺を誰かの力強い腕が受け止めた。親父だった。俺はタイムマシンの前で親父に抱きしめられていた。

「アルベルト……無事でよかった……！！」

親父が泣いていた。しわくちゃの服や無精ひげで、よれよれのネクタイや左右の色の違う靴で、親父が泣いていた。

俺は親父の胸にぎゅっと顔を押し当て、大声を上げて、泣いた。

五

水族館のような大きなガラスの向こうに、青く輝く地球が見える。ＩＳＵのいつものカフェでコーヒーを飲みながら、俺はぼんやりと、海に浮かぶ小さな島国を眺めていた。

「これ、忘れ物よ」

かたん、とテーブルに何か置くとともに現れたのはダニエルだった。今日はカジュアルな服装をしている。

「俺の指輪とピアス？」

そういえばフィールドワークへ旅立つ前にはずして、それっきりだった。

俺はこちらでは十日間行方不明になっていた。ＩＳＵの教授陣が必死で時空乱流の軌跡をたどった結果、俺が江戸初期、正確には１６５７年に飛ばされていることが突き止められたのだという。

フィールドワーク中に学生が行方不明になったという話はまたたくまに広まり、地球からマスコミと、ついでに俺の親父が飛んで来た。親父は俺が見つかるまでテコでも動かないと言い張って、タイムマシンの前に陣取っていたのだという。

「日本を見てたの？」

俺は答える代りに、再び地球へ視線を戻した。

「ダニエルはどうしてインストラクターになろうと思ったんだ？」

ダニエルは目を丸くした。

「私の話？」

椅子を引いて腰を下しながら、彼女はそうねえと頬杖をつく。

「私も君と同じ歴史学科の学生だったの。四年生の時にフィールドワークでタイムワープして、そこでちょっとトラブってねえ」

ダニエルは言いにくそうに苦笑いした。

「ダニエルが？何があったの？」

「秘密。私のプライドにかけて秘密よ」

「ちぇ。それで？」

「それで、その時、一緒にいたインストラクターが全部カバーしてくれて、何とか無事に帰ってくることができたの。それだけよ」

俺は黙って瞬きした。

「それだけかよ？」

「そうよ、悪い？そのインストラクターの仕事ぶりを目の当たりにして、すごくかっこ良いと思ったからよ」

ダニエルの答えにがっかりしたその時、どこからか残月の声がした。

『成すべきことというものは、ある日突然降って来るものではおざんせんよ、神林様』

胸が痛むような、熱くなるような、不思議な感覚に襲われながら

俺は再び地球へ目を向けた。小さな島国。そこに確かに彼女はいた。

「あのね、私も歴史学科の天才少年の噂は耳にしたことがあるわけだけどね、子が親の影響を受けて職業を継ぐっていうのは、とても自然なことじゃないかな。一番身近な働く人、それが親だもの」

「へっ、いまどき、時代錯誤だっての」

俺は腕時計をちらりと見て椅子から立ち上がった。

「あら、もう時間？」

「おう。今日、親父も来るんだ。だっせーだろ、授業参観みたいで」

俺が胸を張って威張って見せると、ダニエルはくすくすと笑った。

「そうだ、これ、忘れるところだったわ」

言いながらダニエルは鞄から一枚の紙を取り出した。

「東洋史の教授についてがあってね、調べてもらったの。明暦の大火の三年後に出版された吉原遊女の批評本のコピーよ。ちゃんと訳も書いてもらったから、どうぞ」

ダニエルがくれた紙には着飾った美しい遊女が凛とした姿で描かれ、その脇にミミズのような筆文字が躍っていた。筆文字の横には青いボールペンで小さく訳が記されている。

『天青太夫。十八歳の傾城。生き別れた恋人に操を立て、決して帯を解かないという』

胸がつまった。目頭が熱くなった。手が震えた。

彼女は約束通り、あの大火を生き延びて、立派な太夫になったのだ。

「ライブ、私も聴きに行くわね」

泣きながら立ちつくす俺に背を向け、ダニエルは去って行った。

「君は言った
敷かれたレールを歩むだけの人生も
決められた道を進むだけの未来も
運命から逃れた今日や明日も
望んだとおりの生き方さえも
苦難に満ちた戦いの日々だ

ならば己に誇れるように
背中を見せずに戦い抜こう
勝っても負けても笑っていよう
逃げも隠れも泣きもしないで

自由も夢も希望も愛も
見失っては探すばかり
現実や社会と向き合っては
疲れ果てそれでも自ら鞭を打つ

俺は君の言葉を胸に
君の生きた人生を想い
この足で踏み出す

どんなに傷ついても
どんなに汚れてもいい
歩んでいこう
君に誇れる人生を 」

野外ステージに七色のライトがぎらりと踊る。

「えー、俺たちのバンドは今日で解散となりますが、俺は来年度から医学部に編入することになったので、これからもよろしく頼むぜ！」

俺はマイクを、握り直した。

おわり

五（後書き）

最後までお読みいただきましてありがとうございます。何か感じていただけましたら幸いです。

ご感想などどうぞお気軽にお寄せ下さい。

※参考※

Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ

吉原雀：ｈｔｔｐ：／／ｙｏｓｉｗａｒａ．ｎｅｔ／

※いいわけ※

一、天青太夫と残月の廓言葉は適当です。

二、その他、いろいろと適当です。

◆伊那さま主催の【和風小説企画】はこちら◆

ｈｔｔｐ：／／ｗａｆｕｕｋｉｋａｋｕ．ｗｅｂ．ｆｃ２．ｃｏｍ／

和風小説、和風絵もりだくさんです！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5124v/

竹取少年

2011年8月7日21時44分発行